

## 鳴海潟を渡る(中・下)…笠寺台地を行く

## 1 笠寺縁起

笠寺台地は、古くは「松巨嶋」と呼ばれました。確かに地図で見ると周囲から10<sup>メートル</sup>ほど高く、島のような島です。完全な島でなくても周囲に水面が見えると、松の多い島のように見えたのかもしれませんが。

この台地の中央に有名な笠寺観音があります。733年、禅光という僧が西側の呼続の浦に漂着した霊木で十一面観音像を彫り、小松寺を造って安置しました。場所は現在地の東南1<sup>キロ</sup>程の所です。その後廃れ、雨ざらしになっていた観音像に、自らの傘をかけてあげた心優しい娘がいました(図1)。笠寺の略縁起では鳴海長者の侍女とされる娘は、その縁

で通りかかった関白藤原基経の子、兼平に見初められ夫婦になりました。そして兼平は寺を現在地に再興し、名も笠覆寺と名付けたといひます。この笠寺の縁起から考えると、10世紀には京から東国の任地に向かう街道がこの笠寺付近を通っていたこととなります。

今回は、この笠寺台地を抜ける鎌倉街道を、中央部を通る「中ノ道」と、その南を通る「下ノ道」に分けて、その姿を追ってみたいと思います。

## 2 中ノ道と下ノ道

## (1) 笠寺台地

笠寺台地には、先ほどの小松寺の所に粕島貝塚があります。これは7000年前、縄文早期の名古屋では最も古い史跡の一つとされます。当時は鳴海潟を見下ろす良い立地条件だったのでしょう。以降、この台地は古代、中世とさまざまな歴史が刻まれてきました。

中世で注目されるのは、笠寺の故事とともに末期の城郭群です。この台地は鎌倉街道を押さえる要地として、山崎、戸部、星崎など10箇所を越える城跡が確認されます。そこ



図1 笠寺縁起(『尾張名所図会』)

は織田方と今川方の虚々実々の駆け引きが繰り広げられた地域でもありました。

また、この台地の西側は古くから塩浜がありました。江戸時代の初めに100町という規模だったことから、鎌倉街道の時代も相当の大きさだったと考えられます。

## (2) 白毫寺と村上社

この台地の西と東に鎌倉街道の跡を伝える史跡があります。西は白毫寺で、台地の西北の角にあり、熱田や井戸田からの街道の入口にあたりました。寺は1571年の創建ですが、景勝地で、源頼朝が上洛の折に休んだことから棧敷山と呼ばれていました。伊勢湾台風まで頼朝旗掛けの松が残っていたといえます。

東は村上社で、当時から鳴海潟を通過する時の目印になったという楠の大樹です。今では樹齢千年といわれ、幹周りが11mという巨大樹になり、市の天然記念物になっています。そしてこの東西二つの史跡の間には江戸時代から街道跡とされる道が2箇所残っており、中ノ道の鎌倉街道跡を裏付けています。

## (3) 再興された笠覆寺

この台地のもう一つの街道跡は、はじめに紹介した笠覆寺観音の故事を辿るものです。笠覆寺は、その後廃れましたが、13世紀に僧阿願が再興し伽藍を整えました。広大な寺域が寄進され、僧坊も12に及びました。

寄進状から再現された寺域は、東西200m、南北380mと南に大きく広がり、北と東は谷、南と西には堀が掘られていました。そしてその西に「大道」が通っていたといえます(図2)。寺の南に行った所に、大門、市場という字があるのはそれを裏付けているといえます。街道(下ノ道)は、寺の西側から南側に回り、寺と市場の間を通過して東側に抜けていたと見ることができそうです。

## (4) 中ノ道、下ノ道のルート

中ノ道は、熱田や井戸田から台地の西北部の白毫寺付近に取り付き、台地上を東北東に進みました。そして村上社の楠の大木の所から鳴海潟の跡の低地に下り、川を渡って対岸、

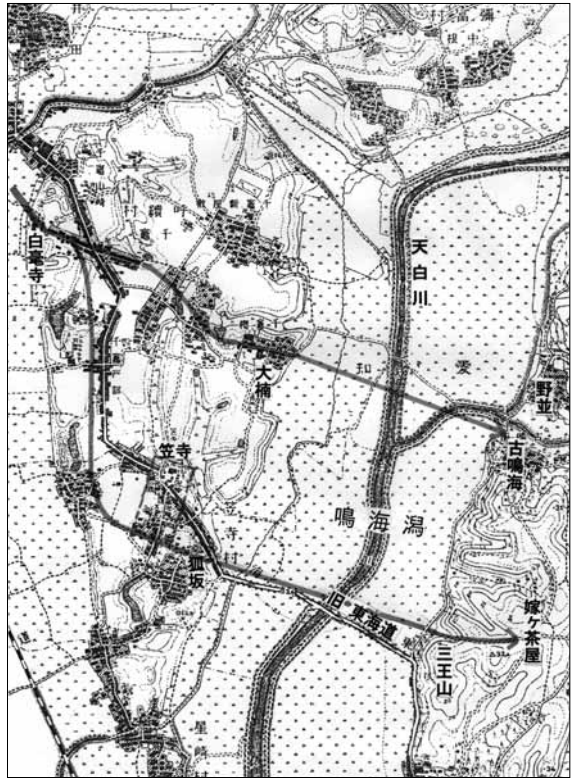


図2 笠覆寺の旧寺域(文献①)と中ノ道(上)、下ノ道(下)の想定(明治中頃)

今の古鳴海に向かったのではないでしょう。この付近の鳴海潟は中世初期にはまだ干満のある区間だったと考えられます。

下ノ道は、白毫寺を過ぎてから中ノ道と別れて南に曲がり、塩浜を見ながら台地の西の角を進みます。今の長楽寺の東にある南北の細い道が鎌倉街道の跡だといわれます。台地が下りかける手前で東に曲がり、笠覆寺の南を通過して東に台地を下ったのではないのでしょうか。渡る鳴海潟はほぼ江戸時代の東海道の付近で、中世末でも感潮区間だったと考えられます。(図2)

## 3 鎌倉街道をさがす

### (中ノ道)

それではまず中ノ道から街道跡を追ってみましょう。名鉄本線の呼続駅を降り、西に行くとすぐ旧東海道と交差します。通り過ぎて2つ目の信号を左に入り、100mほど行った右側の細い道に入ります。道はすぐ左にカーブし坂を上ります。この道が鎌倉街道の跡といわれ、坂を上ると白毫寺になります。寺に入り

白毫寺にある年魚市潟勝景の碑。今は木々の中に



本堂の左に回るといくつかの石碑の中に「年魚市潟勝景」の碑が目にはいります。今は木に覆われて展望はありませんが、当時は塩浜の向こうに海を眺める景勝地だったのでしょう。

寺を出て先ほどの道を東に進みます。街道跡とされる道は幅3メートルもなく、そこから1キロ弱、まっすぐ続きます。途中、旧東海道と交差した東側に地蔵院と黄竜寺があります。いずれも中世の末に立地しました。道は東に住宅地の中を進みますが、名鉄本線を通り過ぎた辺りから後の街道は定かではありません。突き当たって右、左と曲ると幹線道路(環状線)に出ます。桜本町の交差点の東南には中世には城があり、台地上には凹凸もありました。街道は真直ぐを基調としつつも、それらを避けて楠の大木を目指したと考えられます。

桜本町の交差点の東、2つ目の信号を右に



桜本町東南の鎌倉街道跡とされる道



村上社の樹齢千年とされる楠の大木

入ると少し先に公園があります。その公園(池の跡)の南側の道が鎌倉街道の跡だといわれます。その道が東に下り始める手前を右に100メートルほどの所に楠の大木の村上社があります。樹齢千年を越す大木が辺りを圧しています。街道は、その後付近の坂を下って鳴海潟の作った平地を古鳴海に向かっていました。

## (下ノ道)

下ノ道を迎えるために大楠の所から台地の東端を通って笠寺観音に向かいます。村上社を南に、すぐ西に曲ると桜台高校です。高校に沿って南に進むと、途中、八幡社と桜田貝塚跡を通り見晴台の史跡公園に出ます。公園に入り考古館の前の道を西に進むと、坂を下り、上って笠覆寺の敷地に入って行きます。



尾張四観音の一つ、天林山笠覆寺。中世は大伽藍だった

中世の寺域を探して南門を潜り、旧東海道を越え南に進みます。少し行った左手に僧坊の東光院があります。ここは宮本武蔵が巖流島の戦いのあと滞在したとされる所で、手彫りの木刀と左右で書分けた書が残ります。

さて、中世の寺域はその少し南と考えられますが、今は東に抜ける道がありません。東光院の横を東に、すぐ南に行くと2本目の東に行く道が、寺域、方向、つながりの面で街道跡の候補でしょう。細い道を東に行くと下



旧寺域の西南角付近の下ノ道ルート(?)

狐坂を下る



り始め、狐坂と呼ばれる坂になります。途中、石仏や古井戸などもあって江戸以前の東海道ということを裏付けています。

坂を下ると旧東海道の一里塚に出ます。ここから先はもう鳴海潟の低地で、道跡はありません。旧東海道を東に、天白橋を渡ります。正面には目的地の三王山が真近です。堤防の坂を下り、旧東海道と分かれて左手の新道を選べば山麓の交差点です。鎌倉街道はこの付近から三王山の谷間を上り嫁ヶ茶屋に向かっていたと考えられます。

山上へは交差点東に階段があり、30<sup>メートル</sup>弱を上ると公園に出ます。公園の奥、南東角には、芭蕉が生前に立てた唯一の句碑、千鳥塚があります。「星崎の闇を見よやと啼く千鳥」の句はまさにそこからの眺望を詠っているようです。句碑を西に下れば、少し右に行って三王山のバス停です。



天白橋付近の天白川

天白橋から正面に三王山を望む



図3 伊勢湾台風による湛水日数の図。白く浮ぶ笠寺台地、再現した天白川の旧姿、鳴海潟(『伊勢湾台風災害誌』より)

#### 4 鳴海潟を渡る三つの道

前回と今回で鳴海潟を渡る三つの道を紹介してきました。これらの道は中世のいつ頃存在し、使われていたのでしょうか。3本とも同時に存在した可能性もありますし、時代とともに移っていったとみることもできます。

よくされる説明は、鳴海潟の海退とともに上から下へと移っていったというものです。この説明は分りやすいのですが、疑問も残ります。たとえば上と下ノ道との間には、標高差で2<sup>メートル</sup>から2.5<sup>メートル</sup>ありますが、そんな量の海退現象があったとは思えません。また中や下ノ道が、笠寺縁起や頼朝上洛という中世以前に歩かれていた可能性があることです。もちろんこの時は舟や馬での横断だったかもしれませんが、上から下へ移ったというものでなさそうです。いずれにしても、まず、鳴海潟がいつ頃、どんな形で存在したかを明確にする必要があります。

伊勢湾台風するとき、1日だけ鳴海潟が戻り、松巨嶋が復活したといえます(図3)。湛水区域で海とは違いますが、歴史や地理が生きていることを実感する図です。

〈主な参考文献〉

- ① 三渡俊一郎「南区の歴史」(1986、愛知県郷土資料刊行会)
- ② 同「鳴海潟の変遷について」(1982、郷土文化36巻1所収)
- ③ 森達也「鳴海潟の証言」(1983、奈留美13号所収)